

だいよんぶ
第四部 第四話 東尋坊
とうじんぼう

むかし、福井県坂井郡三国町安島の海岸に、形が変わったためずらしい岩が、数百メートルに渡ってそびえたつた所がある。その下が深い海のふちになっており、切りたつた崖は、あらあら美しい。美しさがあつた。このたいそうきれいな景色の地を、「東尋坊」といい、また、夏の初め頃、日本海を吹き荒れるつむじ風を、「トウジンボウ」と呼んでいる。

地名の東尋坊も風のトウジンボウも、お坊さんの名前がもとになっていると言われる。東尋坊は、お坊さんになる前の名前を次郎市といい、福井市荒木別所の出身である。室町時代の永きょう亨のころ（千四百三十年頃）の人で、若いときから非常な力持ちであり、また大變酒好きで、よつぱらつては力まかせに乱暴な行いが多かつた。しかし、こんなことでは將來、ろくな者にならないだろうと、自分から決心をして、福井市寮の勝縁寺というお寺の和尚さ

んのところへお坊さんになりに行った。

かれの家が、この寺のお坊さんや寺を世話する家であった関係による。

寮という変わった地名は、平安時代ここに大学の人が

泊まる所、大学寮があり、お坊さんたちが勉強して

きたことによる。大学寮の近くに、淵池があり、そこに

住んでいた金竜が、寮に阿弥陀仏の仏の姿をした

彫り物を、寺にさし出し、ろうそくのような明かりになる

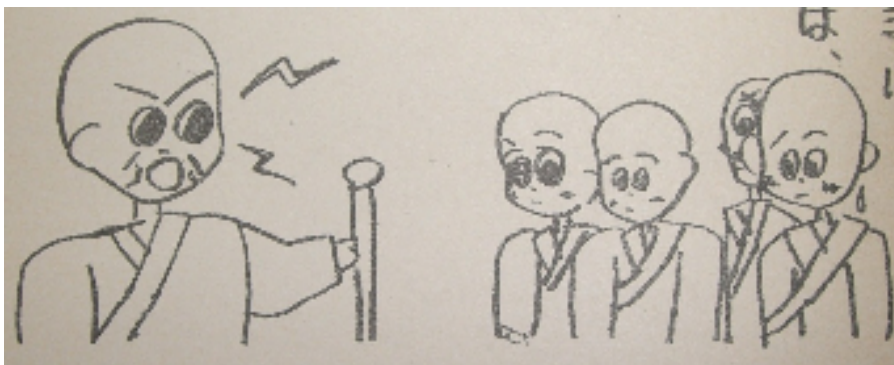
灯をささげたので、寮が寺になったという。



それが 竜 燈山 勝縁寺である。次郎市は、この金 竜の阿弥陀仏を特に信じた。彼はやがて
比叡山に登り、いろいろな勉強をしたので、東尋坊は評判の高い
人になった。東尋坊は、越前の殿様に招かれて、平泉寺の東尋坊
に住むようになった。

その平泉寺というお寺は、たくさんの部屋があり、その中の一つに、
その東尋坊という名前がつけられた。東尋坊は、東尋坊に住む
ようになったのだ。

そのころ、平泉寺には悪いお坊さんがいて、お寺の領地を
だましとる計画を立てていた。東尋坊は、それをうわさで聞いて



いたので、かれらを集めて、「そのようなことは、仏に仕える者のやることではありませんぞ。」と、厳しく言った。ところが、悪いお坊さんたちは、逆に東尋坊をじゃまに思い、かれを殺すという悪い相談をし始めた。

ちよūdōその頃は、夏（今の五月頃）の風さわやかな季節であったので、「のう、東尋坊殿、安島の浦の岩場をご存じかの。あそこの海を見ながら、

酒を飲もうじゃないかの。」と、誘った。

酒好きな東尋坊は、つい誘いにつて、安島の岩場へ来てしもうた。

悪いお坊さんたちは、東尋坊にどんどん酒をすすめた。

かれが十分酔っぱらったころ、沖の舟を指さして、「あれは、

どこの舟じゃろかな。」と、たずねた。東尋坊は、よろよろと



立ち上がり、岸壁の淵まで出てきて、舟の帆についている印を見ようとした。そこを悪いお坊さんが、後ろから、「ドーン」と、つき落とすのだ。「これで、じゃま者はいなくなったし。」と、言いながら帰ろうとすると、今まで晴れ渡っていた空が、急に曇り、すごい雨が、「ザーツ」と降り、その上、カミナリまでもが辺り一面に、「ゴロゴロドツシーン。」と、響き渡った。

そして、ついには、そのカミナリが、悪いお坊さんの上に

落ち、みんな死んでしまったとき。

それ以来、毎年夏になると、つむじ風が吹き、海が荒れる

ということだ。

